

発行所

静岡県高等学校障害児学校教職員組合
静岡市葵区駿府町1-12
高教組新聞編集委員会
http://www.s-koukyousho.jp/
e-Mail info@s-koukyousho.jp
TEL (054) 254-6900
FAX (054) 254-0814
Facebook:「静岡高教組」で検索

第461号
2020年
12月16日

高教組しんぶんは組合費とカンパによって発行されており、
全教職員に配布しています

あなたも高教組へ

2面・静岡県教育のつどい



少人数学級実現のチャンス 請願書提出



11月25日、子どもと教育を考える静岡県民会議は、「すべての子どもたちにゆきとどいた教育を求める請願署名」と共に、山田誠静岡県議会議長に、少人数学級、教職員の定数増など教育予算の増額を求める請願書を提出しました。静岡高教組、全教静岡、静岡県労働組合評議会、新日本婦人の会の代表が参加しました。

追加して合計12542筆になりましたが、当日は8244筆の署名と共に、請願書を提出し、事務局長代理が趣旨を説明しました。

「コロナ禍で学校の大切な課題が明らかになった。教育予算増額による少人数学級と教職員の定数増が急務。署名は全県の高校の校長とPTA会長にもお願いして集まった、思いが詰まったもの。不登校が史上最高、35歳以下の自殺率が世界一、学校が魅力的な場になっていない。OECDの中で1クラスは40年前に25人では多すぎると教員がストライキして改善、学力世界のフィンランドでは、23人の教室に教師が3人。目が行き届き、子どもたちにとって楽しい学校づくりが求められている。県議会で採択し

サポートができるよう、先生を増やしてほしい」

「災害時には避難所にもなる学校、体育館。施設設備の充実を望む」などを訴えました。

山田誠県議会議長は、「しっかりと議論することを約束する。エアコンなどの整備は始まり、ICT化、タブレットの配布も進めようとしている。環境整備は急務だ。特別支援学校学級についても、生徒増で過密・過大は深刻、普通学級からの転入に抵抗を感じている保護者もいる。改善に取り組みたい。」と応えました。

「国の動向を待つのではなく、「教育先進県」と言われるような取り組みをしてほしい」と、採択のための真剣な議論を要望しました。

11月27日には、松井教育監と出野副知事に請願した内容を申し入れ、懇談しました。

「来年度の高校の募集では、生徒減のためクラス減だと聞いた。クラス数を維持して少人数学級にするチャンスではないか」

「先生死ぬかも」の投稿が波紋。精神疾患が多いと聞いたが心配」

「過大・過密な特別支援学校をもつ静岡県として、独自に望ましい設置基準を示し、国に求めてほしい。『インクルーシブ教育』と称して、通常学級へ組み込む流れもあるが、特性に合わせた専門的な指導も必要」など参加者から訴えました。

出野副知事は、「コロナ対策として、特に子どもの健康・安心を守るため1260億円の補正予算をつけた。歳入が減少しているが、議員を通じて国の交付金増額も働きかけている。」

少人数学級が学力向上に効果的かどうかは、検証する必要がある。

私学については、590万円未満のところを静岡県独自に上乗せし、年収700万円未満の家庭を事実無償とした。

子どもたちの命を守るために耐震化は、小中は99.8%、私学も98.7%完了。トイレの洋式化は老朽化対策に合わせて実施し、5割超完了。エアコンも高校の普通教室には来年6月には設置できる。

ICT教育についても、それがすべてではない、画面を通して何ができるか検討が必要」と語りました。

教育監と副知事にも申し入れ

主張

今年度はコロナ禍で多くの学校行事が延期や中止、内容変更を余儀なくされました。特に影響が大きかったものの一つが文化祭(学校祭)です。開催の場合でも一般公開を中止したり、規模を縮小したりする場合がありますが、

祭は中止になったもの、そこで展開するのは、そこで展開するはずだった、古着をポリオワクチンに代える活動を生徒有志が自主的に続けたという例もあります。これらはいずれも、困難な状況下で文化祭の意義や形式(フォーマット)そのものを問い直す取り組みであったと言えます。

ところで、YEC(若者エンパワメント委員会)をご存じでしょうか。その趣旨は「すべての若者が思いを形にすることを通じて社会のつくり手となるために」。その代表的取り組みが「もうひとつの放課後探しプロジェクト」。中学生・高校生が、

今こそ、学校行事のあり方を考えよう

静岡県立大の学生が2009年に立ち上げた団体で、津富宏先生が顧問を務めています。「静岡県教育のつどい」などを通じて高教組ともご縁があります

自分の生活を部活や勉強、塾などといった選択肢の中から選ぶのではなく自らやりたいことを見つけ、企画として形にする過程を通して、学校という枠を超



コロナ禍という状況下に限らず、こうした活動には文化祭や修学旅行などの学校行事の意義を問い直すための大きなヒントがあるように思うのですが、いかがでしょうか。

(執行委員 遠藤寛)

視座

2019年、教え子に誘われ、走り始め、大晦日に1000キロを達成したんです。無理して膝が痛くて、走れない時期もあったのですが、ちなみに2018年は走行距離0キロ▼さて、2020年、新年早々、喫茶店の段差で捻挫して、一ヶ月ほど走れなかったのですが、先月1000キロ達成しました。週休2日で1日5キロ、月に100キロ走って▼走り始めた頃は、痩せよう、と思っただけです。でも、無理でした。走るたびに、自分に誇りをあげるもので。マラソン大会参加も考えたんです。でも、速くはなりません。少しも。そもそもレースなど向いていないのです▼何のために走るのか?よく聞かれるんです。よくわからなまま、ほぼ毎日走り続けてきました。最近思うことは、自分が自分であり続けるためのかな、と▼2015年の「戦争法」の時、よくデモに参加しました。残念ながらデモでは強行採決を止められませんでした。なぜデモに参加したのか?あるひとは、デモなんか意味ないと言っている人間に変わらないうえ、と。そう、自分が自分であり続けるため!▼組合に入っているのも同じかもしれない。間違ってると思えば、たとえ管理職だろうと県教委だろうと、間違っていると。良心に反して上や周りに従うことも最大のストレス。私も簡単に心は折れますから▼さ、明日も走ろう。ゆっくりと。



語り合おう! 地域と学校にできること

～コロナ禍で見えてきたこと～

11月22日、葦山文化センター(葦山時代劇場)で、「第13回静岡県教育のつどい」を開催しました。清川輝基さんの講演は、静岡県教職員互助組合高校支部の教育講演会として行いました。伊豆の国市の父母も含め、約50人が参加し、午後3時の分科会に分かれ、語りあい、学びあいました。

清川輝基さんは元NHKニュース編集責任者。スクリーン機器使用による子どもたちの眼、脳、筋力の衰えに危機感を持ち、文科省、経済産業省にも提言。GIGAスクール構想の拙速な導入にも警鐘を鳴らし、自らも不登校の子のために体験型学習の学校を設立し、現在は名誉会長。コロナを恐れるあまりに人が集まりにくくなることによる民主主義の衰退を危惧し、自らの命を賭しての講演には鬼気迫るものがありました。

A分科会

授業づくり、学級づくり

上坂はなさんは「ぼくのこと、おこらないの?」(シヨウと私が紡ぐ緩やかな関係)をオンラインで報告しました。オンラインも含めて20人が参加しました。シヨウは、軽度の知的障害。やればできるのに怠けているとみられがちで、叱責されることが多く、自己肯定感が低いようにみえた。子どものペースに合わせて指導をしたい上坂さんは、シヨウに対する学部の指導方針に悩みつ、シヨウに関わった。給食

の時間が苦行の時間にならないように、「嫌いなものは食べなくてもいいよ」と。プレッシャーから解放されたシヨウは「でも頑張る」と意気込むがなかなか食べられない。ようやく3日目、ほんの少しを食べることができた。苦手なものを食べられたという成功体験は大きな自信につながった。が、このような指導は「甘い」指導ととらえられてしまう。参加者からは「甘い」を悪いととらえるのではなく、「援助を求める表現」であり、「自分の意見を言う」ことを通じての「自立の要求」であるから大事にしたいという発言があり、賛同の声が上がりました。シヨウは嫌なことをさ

参加者の感想

「報告に心を打たれました。まとめにあった『自分らしく生きられるよう励まし、子どもの可能性を伸ばしていくことが一番大事なことだと改めて感じた実践でした。(執行委員 前田浪江)」

B分科会

「子どもの居場所」

「ゆめまっねつと」の渡部達也さん(敬意を込め以下たつちゃん)と記します。富士市でもう15年子どもの遊び場づくり、若者の居場所づくりに取り組む著名な方です。私は初めて話を聞くことができました。 たつちゃんはコロナ禍でも、気になる子ども若者と関わりを続けます。活動を縮小せざるを得ない中、あの手この手で彼らと直接会い続け、「ハラハラと心配しながら見守り続ける」ことを実践します。かつてある児童の宿題を手伝ったたつちゃんが、児童



模索していく機会となりました。(初参加者)

C分科会

「コロナ禍で見えてきたこと」

コロナ禍での学校のとりくみを交流しました。葦山高校の写真報道探求部の休校中に発刊した56号分の学校新聞「龍城學報」は圧巻でした。コロナ対策特集だけでなく、幻の答辞、離任のあいさつ、新任先生紹介、エア遠足、9月入学やコロナ給付金に関するアンケート調査、文化祭半日開催などの記事には、感激しました。

「放課後居場所カフェ」

沼津工業高校定時制で「放課後居場所カフェ」を開催している、青少年就労支援ネットワーク「サポぬま」の小和田尚子さんと渡邊慈子さんにお話を伺いました。楽しみながら、学習や生活上の困りごとを聴き、地域のサポートとつながって伴走型の支援をしています。仕事探しや面接練習、バイト先のパワハラや低賃金への対処、退職届の書き方などにも親身に相談に乗り、卒業生にとつてのセーフティ

参加者の感想

教育とは「仲間と、声を出し、体を動かし、共同で何かをやり遂げる」ことに尽きると、改めて確信できました。校内だけでなく、地域の集団に属し、社会の一員として役割をもつことも必要です。

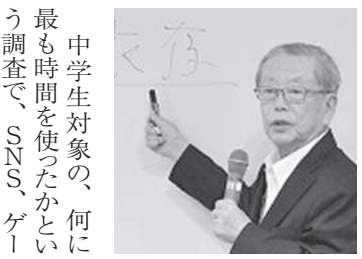


子どもに寄り添って、声を聴き、共感し、理解する。時には、無条件の肯定も必要。私の教員としての姿勢を考えるよい機会になりました。(初参加者)

清川輝基さん講演要旨

スマホ社会の落とし穴

子どもが危ない



遠くの木や山を見て、鳥や虫などを追いかけて、捕まえることで眼球を収縮させる筋肉や足腰の筋肉が発達する。その時間を奪うことになる。走る、投げなど身体能力も目を覆うばかりの低下。キャッチボールをしていてボールが顔にあたってしまふなどの事故も立体的でできないから。スマホを与えることは百害あって一利なし。この子たちが80歳になる22世紀の高齢社会、悲惨なことになっている。ゲームなどやって

会生活に必要なスキル習得以前のゲーム依存。立ち直った子たちは「あの失われた時間が惜しい」と悲痛に語る。東北大学の川島隆太教授は、スマホとゲームを使う時間に比例して学力が下がると主張。信州大学の入学式でも電子工学専門の学長が「スマホは毒以外の何物でもない。捨てられないなら、退学してください」とあいさつ。ビル・ゲイツも自分の好みの情報だけ取り入れ、嫌な情報を排除する傾向がある。ナチスのような宣伝や大本営発表をやらなくとも、自由にネット上で操作できてしまう。変えるべきは、40人

世界一のフィンランドでは、低学年こそ学びの楽しさを教えねばならないと23人に対して教師が3人ついていて、イギリスでは25人でも多すぎると40年前に教師がストライキで20人学級を実現。40人学級を30人と文科省が提起したが、財務省がつぶしてしまつた。現場の声を政治に反映させるためには、自民党の議員にも働き掛け、わからせる努力が必要だ。

子どもに寄り添って、声を聴き、共感し、理解する。時には、無条件の肯定も必要。私の教員としての姿勢を考えるよい機会になりました。(初参加者)

中学生対象の、何に最も時間を使ったかという調査で、SNS、ゲームなどの視聴、スクリーンタイムが95%と最多。視力Dレベルが中3になると37.9%と激増。将来失明の恐れのある強度近視が小学生でも急増している。

ゲーム・スマホ使用時間の調査を3年前までやっていたが、削られ、昨年は調査自体が消えてしまった。期を同じく

乳幼児期にスマホを見せるのは、虐待以外の何物でもない。子ども時代には、外で遊び、

依存症はWHOでも精神的疾病に指定された。一番悲劇なのは社